

翻訳：『15世紀の書物—写字生、印刷家、 装飾家』（その1）

カート・F・ビューラー（著）
向井 毅・田村水幸・神山絵美（共訳）*

第1章 写字生について

15世紀は記録された歴史のなかでもっとも奇妙で混乱した時代の1つであると考えられる。新旧両時代の要素、つまり中世最後の開花期とわれわれ自身の近代の始まりとをあわせ持っているからである。なかでも非常に不可解でかつ混乱を招いているのは、15世紀の書物生産と50年間という短期間に驚くべき発展をとげた印刷産業の話である。印刷の発明という歴史的出来事は、実に驚くべき量のあきらかに自己矛盾した推測と理論化を生みだした。これらの矛盾を検討することがこの一連の講義の主な関心事である。

15世紀は異例の時代であり、例外に満ちている。このことを、私個人が集めた15世紀の書物のささやかな蔵書の中にある、1冊の書物を描写することによって説明させていただくことにする。この書物はよく知られた『懺悔録』の本文を含み、羊皮紙54枚の紙葉で構成されている。折丁記号は a-f⁸ g⁶ と表記でき、それぞれの折丁にはつなぎ語が書かれ、紙葉にはテキストのセクションを示す手がかりを提供する欄外見出しが書かれている。書き始め語には赤と青の立派な頭文字が使われており、それがペイター・シェーファーの作品を想起させる。この書物にはまた朱書きがあり、他の場所には彩色師による大文字挿入のためのスペースが置かれている。奥書を翻訳すれば、『告白し、悔恨する方法』についてのこの作品は、1486年1月8日に活気ある都市アントワープにおい

*向井 毅（福岡女子大学文学部英文学科）、田村水幸（福岡女子大学大学院文学研究科博士後期課程）、神山絵美（福岡女子大学大学院文学研究科博士前期課程）

て、私、ジェラード・リユーにより完成された」となる。ハイン＝コピンガー(11495)、キャンベル(1130)、ポーレイン(3219)⁽¹⁾などの書誌において引用されているテキストの抜粋は、もし日付が1月28日に修正されたなら、私の所蔵コピーの本文と一致する。

私がこの書物を生みだした人物について何かを知りたいと申しできれば、その印刷者ジェラード・リユーについてなら実際多くのことが知られているはずだと言われるであろう。確かにわれわれは知っている。しかし問題は、私が今説明した書物は実際には決して印刷されず、したがって十中八九、リユーによって出版されてはいないということである。それは写本である。20年前、私はこれを「珍しい15世紀の写本」と述べてきた。これについて唯一の珍しい点は、私自身の無知を実に堂々と人前にさらしたということであった。現在私が知るころでは、印刷本から写されたこのような写本は数多く現代に残っている。そして経験から分かることは、15世紀後半に作られたとされる全ての写本は、ほぼ例外なく（そしてしばしば疑いなく）初期刊本を書き写したものであるということである。書誌学についてのわれわれの知識がこのようなありさまであることから、この状況は1450年以前に書かれたと考えられている写本にもあてはまる可能性がある。これはわれわれが後に検討する話題である。今のところは、手書き本と印刷本の両世界の間に存在すると誤って考えられてきた未開の領域に足を踏み入れたのだ、と言うだけで十分であろう。もちろん実際には、15世紀の写本と初期刊本との間にはほとんど違いがない。そしてもし初期の印刷術を研究する人が、最初の印刷者たちと同じように、その新しい発明を単にいまひとつの新しい書き方にすぎないと考えたとすれば、それは正鵠を得ていると言えるだろう。ただしこの場合は「人工的な書き方」であるけれども⁽²⁾。

それにもかかわらず、印刷本に比べて写本が持つ価値と重要性をめぐる大変奇妙な誤解が広まっている。全ての写本はあきらかにどれひとつ同じではない。だからといって、全ての写本が本文的価値や学問的意義を持っているということにはならない。反対に、非常に多くの初期刊本が複数のコピーで現存する。しかし何十というコピーで残っているからといって、その版が本文を確定するにあたって第1級の価値と重要性を持たない、ということにはならない。実際には、写字生たちの無知と不注意は（これはキケロ、ストラボン、ロジャー・ベーコン、ペトラルカ、レナード・ブルーニ、チョーサー⁽³⁾、レジナルド・ピーコック司教など、さまざまな偉人の激怒を引き起こした話題であるが）どれ1つとして同じではないという写本の特色、それに手書きであるために高コストとなる必然性ととともに、同一の本を生産する技術が発見される以前の、書物生産上の主たる欠陥を表している。ラブレが、「それは書かれているから真実な

のだ」という考えを肯定するとき、もしそのことが何かを意味していたとすれば、彼は写字生ではなく著者に対する信頼を反映していたのである。

世紀の変わり目、キャクストンが1481年の時点でもなおわれわれに思い起こさせるように、「話し言葉は消えていき価値がなくて忘れられやすいが、書かれた言葉は永遠にとどまる」ということは依然として真実であった。もちろん印刷機が導入されるずっと前から、本の生産が確立され、また栄えた産業であったということは、一般的な見解である。本を生産するのに費やされる時間の長さが、写本の入手可能性を制限する要素であったのはもっともなことだ。写本時代を通して本が不足していたことは、ヴィルヘルム・ヴァッテンバッハによる博識で興味深いハンドブックにおいて強調されている。一方ロバート・ワイスは、少なくとも15世紀のイタリアにおいては、売りに出された写本が大量にあったに違いないと主張している。それは、15世紀にイベリア半島に群がったグロスター公ハンフリーや、その他多くのイギリスの人文主義者たちによる写本の購入によって証明されている。実際イギリス人の訪問者がその国から写本を奪い、その地方とアルプスを越えた国々の学者を悲しませた、という話がある。入手が可能であろうとなかろうと、写本が高価であったことはほとんど疑う余地がない⁽⁴⁾。『カンタベリー物語』に登場するオックスフォードの学僧の夢は20冊の本を持つことであった。彼は豪華な外套（彼にはすり切れた上着で十分であった）、弦楽器フィドルやプサルテリウムよりもむしろ、書物を持ちたいと思ったであろう。しかしたとえこの数字が単に概数を表していたに過ぎないとしても、チャーサーは学僧が実際にそれほど多くの本を所有していたとはわれわれに語っていない。しかしながら全ての研究者は、写本が（今日では言うまでもなく）当時でも大変高価なものであったということに異論はない。そしてチャーサーの物語において、ジャンキンがアリソンをひどくたたいたために彼女の片方の耳が聞こえなくなったということは、全く不思議ではない。彼女は、彼の本のページを1枚破り取るという凶悪な罪を犯したのであった。にもかかわらず、反対にわれわれは、『知恵の宮廷』の無名の著者のような二流の作家でさえも、彼の業績とされるあの「文学のモザイク」を世に送り出すために、相当数の書物を利用したに違いないと結論づけざるをえない。もし著者がこれほどの数の書物入手する必要があったとすれば、その当時、写本が購入または筆写のいずれかにより入手できたことは自明である。写本を手に入れるいくつかの方法については、ソリウス・アンドレアエ修道士によるものがおそらくもっともよい例であろう。彼はみずから書いたり、人に書かせたり、出来合いのものを購入することに加えて、コンスタンツ公会議に出席している間に、あちこちの本屋から買い集めた写本を1つのものにまとめたりもしている。

写本の不足と値段によって個人の蔵書の規模が制限されていたとすれば、数名の学者による本の贈与や遺贈に規模の増大を頼っていた大学の蔵書の規模にも制限を与えたことになる。写本がもっとも容易に見いだせるイタリアでは、当然ながら大きな蔵書を所有していることが富裕な人々や権力のある人々の特権であった⁽⁵⁾。しかしイタリアでも写本は一種のぜいたく品であった。というのも15世紀の典型的な羊皮紙の写本は、完成し装丁した形で7～10ダカットの値がしたと考えられていたためである。この値段はナポリの宮廷で働く平均的な官吏の1ヶ月分の給与に相当した。他の場所では状況はさらに絶望的で、50～100年後には大規模な図書館になっていたであろう蔵書を個人的に所有していた学者はほとんどいなかった。ケンブリッジの大学の図書館には1424年の時点でわずかに122冊しか所蔵されておらず、それから50年後でもその数は全部で330冊にしか達しなかったと言われている。1440年頃のクレア・カレッジの目録には111点が挙がっている。1481年にジョン・ワークワースが54冊の写本を図書館に贈ったとき、ピーターハウス・カレッジは全部で439作品を所蔵していた。なおそのうちの200冊のみが残存している。創設者（ロバート・ウッドラーク）から、セント・キャサリン・カレッジは87冊の写本を1473年頃に受け取っている。そのうちの1冊も現在カレッジの本棚には残っていない。フランスでも写本はありふれたものではなかった。シャルル8世はわずか130冊しか所有していなかったようで、そのうち30冊は父親（ルイ11世）の死にさいして手に入れ、残りはもともと母親の所有になっていたものである。また写本がフランス王室の書庫から消えており、1373年に挙げられている188冊が1411年には無くなっていた。本は高価であったのかもしれないが、保護することに関してはほとんど注意が払われていなかったようだ。この公的な機関に与えられた、あるいは遺贈された写本がこのように喪失したことは、図書館の歴史の中でもっとも残念な出来事の1つである。刊本の出現に伴って、写本は時代遅れで不必要なものと思われられるようになり、それゆえに廃棄されたことが示唆されてきた⁽⁶⁾。修道院長ヨハン・トリサイムが、聖職者（彼に言わせれば、聖職者はこの不敬の本を所有していたが、理解できないかあるいは恐れていた）が所有していた写本と刊本とを巧妙に交換したことが思い出される。1550年に、神聖ローマ帝国の宮廷歴史家のニコラウス・マメラヌスは、多くの修道院が同じ書物の刊本を手に入れるとその写本を売り払ったり、譲ったりした事実を嘆き悲しんだ。少なくとも私的な蔵書に関する限り、15世紀最後の年になって初めて、風刺家セバスチャン・ブラントが「蔵書の多さや書物の雑多」を理由に非難した「愛書狂」に対し、警告を発することが的はずれではなくなった。これ以前の数百年間は、本は主として宗教施設によって所有され、個人の所有者は例外であっ

た。

当然ながら写本はものが書ける人になら誰にでも作りだすことができた。つまり読み書きのできるコミュニティに属している人なら誰でも可能であった。したがってこうした本の生産は、職業写字生の作品かアマチュアの活動の結果として生ずるものであった。自分自身のため、また他の人のために書いた「その場限りの」筆記者の数が、職業写字生の合計を決して下回らなかったことは明らかである⁽⁷⁾。私にはむしろアマチュアによる貢献が一般的に見落とされてきたように思われる。私の同僚ジョン・バグローがピアポイント・モーガン図書館所蔵の写本から収集した書き手のリストは、その大半がわずか3種類の資料から作成されたものであるが、自分の書いた写本に名前をサインした2058名もの個人の名を記録している。ここには（私が数えたところ）2380名の書き手を集めているジョン・W・ブラッドリーの研究書には挙げられていない名前が多くある。ブラッドリーの中には写本との関わりが極端にうすい人たちが多数取りあげられている。ブラッドリーは庇護者や彩色師、印刷家、著者なども含めているからである。しかし本当の著者について驚くべきことは、ただ1つの写本によってのみ確認される名前が非常に多いということである。たとえ彼らの写本が他には20世紀まで残らなかったと想定したとしても、彼らが確かにその場限りの筆記者であったことは間違いない。それでも相当数の写本は非常に立派なものであり、ダイソン・ペリンズやシドニー・コッカレル卿、その他の見たてに厳しい収集家たちの私設蔵書に置かれるほどの価値があると判断されたのである。

もちろんそれぞれの国には写本の大量生産に従事する職業写字生がいた。そして彼らの名前もわれわれには知られている。ビスティッチのヴェスパジアーノ、ディーボルト・ラウバー、ルートヴィヒ・ヘンフリン、それにジョン・シャリーの名がにわかに思いつく。しかしわれわれが全く知らない人々の写本工房が存在したことも知られている。具体的には1418年から1421年の間に少なくとも10の写本を製作したストラスブールの写本工房や、ローラ・ルーミス教授が書いたロンドンの書店が挙げられる⁽⁸⁾。ついでながら、文字の点で最も美しく製作された写本は例外なく職業写字生の手によるものであるが、本文の出来が劣悪であることがよくある⁽⁹⁾。同様に写字生はよくそのことを言い訳したり、あるいは巻末で「正しく読もうとする人は、どうか書き手を非難なされないように」とか「書き誤っている場合には、読者よ、それを正されたし」と弁護したりしている。しかしながら公平なところ、われわれはまた逆の証拠を引くことができる。『カンタベリー物語』の装飾的に最も優れた写本、現在ハンティントン図書館に置かれているエズミア写本は、本文の上でもチャーサーの古典を編む

にあたって最高の権威となっているということである。

職業的な書き手集団はまた「半職業的書き手」によって補完され、書物生産の担い手の数は大きく増大している。他の人のために筆写し、書写活動をしてお金を稼ぎながら大学を出る一助とする大学生たちがその一団である。これは教育費を捻出するための財政的解決策であり、学生にとって近代的な1つの便法であった。1820年までドレスデンにおいて隆盛を極め、また今日に至るまで東洋で活躍している「代筆家」のような半職業的な書き手の中には女性も含まれていた。これに関連して、1452年から1476年まで支払いのために書物をコピーしたアウクスブルクのクララ・ヘーツレリンとかいう人物を思い出す人もいるかもしれない。

修道女たちもまた写本を書いたことが知られている。(少なくとも第2次世界大戦の前には) ベルリンに保管されていた『聖キャサリンの生涯』の著者であるエリザベス・ヴァリューツィンというシスターが、例として挙げられるかもしれない。修道女が話題にあがったところで、次に修道院の書写室を考えることにしよう。先立つ数世紀は衰退傾向にありながらも、修道院の書写室は14世紀後半に再び息を吹き返し、15世紀にまでその活動が続いたようである。たとえば修道院長トマス・ドラマエ(1349-1396)の時代には、ロンドンからそう遠くないセント・オルバンスの修道院に新しい書写室が建てられた。われわれは確かに、バーゼル公会議の時期(1431-1449)にドミニコ修道会でわれわれに名前も知られている31人もの写字生がバーゼルで働いていたことを知っている。1492年になっても修道院長アンドレアスは、マグデブルク近くのクロスター・ベルクにある書写室を改築した。このような例は、15世紀においても修道院書写室が用をなし、活動していたことの十分な証拠となる。

専門家による写本の製造は、ある試み(適切な用語がなく「全ての人が自分の写字生を!」と呼ぶ人もいる)によって影が薄くなったと私は確信している。当然ながら自分自身の写本を書くことを妨害するものはなく、従って学識を持つ大半の人は、疑う余地なく書写を実行していた。ペトラルカが書物を書写し、自分自身の詩のテキストをも清書していたのはよく知られている。さらにペトラルカは自分のために写本を作らせ、彼自身の写字生を雇っていたのであるが⁽¹⁰⁾、これに関連してピストイアのツォミーノがキケロの中で書いた次のような言葉を思い浮かべる人もいるであろう。「本は書かせるよりも、すでに書かれたものを買うほうがよい。」この言葉は、現代の「愚か者は他人が住む家を建てる」という諺を想起させる。枢機卿ニコラウス・クサーヌスまでも写本の書写をやったのけた。またチャーサーは公僕としての仕事においても作家としても多くの書写をしていたに違いないと思われる。ただしチャーサーもまた彼自身

の写字生を雇っていた⁽¹¹⁾。ロバート・フレミング、ジョン・フリー、ジョン・ガンソープといったイギリスのユマニストたちは、確実に彼ら自身が使うための書写を行っていた。この動きはブリテン島に限られたものではなかった。たとえばアウグスブルグの裕福な市民であったゲオルグ・ミューリッヒは、彼の出生地の『年代記』を書いている。その一方でビスティッチのヴェスパジアーノは、カスティリオンキのラーポが彼のラテン語やギリシア語の本の多くを書写したことをわれわれに語っている。また彼は、ラーポは「貧しい男」でそれゆえにおそらくこの類の労働を自分自身で行い、身を落とさざるを得なかったであろう、という書籍販売業者による観察を残念そうに付け加えている。アルプスの向こう側の学生は貧しいことでよく知られていた。それに関してはドイツの学者も同様であった。というのも彼らは16世紀になってもまだ本の書写をしていたことで知られているからだ。イタリアの学者は、金銭的には裕福な状況にあり、ときには自分たちのために働いてもらう写字生を雇う余裕もあった。たとえば1475年に、シチリアの学生アルフォンゾ・ディオデマーテはナポリの写字生ヤコーポ・デ・アウレーザと、アルベルトゥス・マグヌスによるアリストテレスの『物性論』の注解書を自分のために書写する契約を結んでいる。独自に仕事をする写字生の中には、彼ら自身が使うための相当立派な蔵書を作り上げる者も現れた。その1人がヴェルツブルクのヨハン・ズイントラムで、彼は1444年（死亡する6年前）に生地にあるフランシスコ会の図書館に少なくとも61冊の写本を寄贈した。彼はヴェルツブルク、ウルム、ロイトリンゲン、エスリンゲン、ストラスブルグ、コルマール、オックスフォード、そしておそらく他の場所でも根気よく書写の仕事をしていた。この几帳面な書物の収集家にふさわしく、彼の書物の多くは「混成冊子」⁽¹²⁾であり、さまざまな作家による短い小冊子が数多く含まれ、ズイントラムの個人的な好みに合うようにまとめられている。

15世紀半ばに突然、(少なくとも書写する者にとっては)思いがけないことに、活版印刷が登場し、写字生が従事していた秩序だった競争のない世界に割り込んでくることになった。このことは写字生と彼らの暮らし向きにどのような影響を及ぼしたのだろうか。1つ心に留めておかなければならないのは、書く能力によって生計を立てていた社会層の中で本を書写する人はごくわずかにしか過ぎなかったという事実である。大多数の人が法廷や、宮廷、大法官庁や文書館、その他政府の役所やさらには通商の役所で、みずから進んで就いた職業に従事していたことは明白である。後者の人たちは、新発明の出現があっても何ら変わりなかった。実際、彼らは19世紀の終わりに近代的な商売道具が導入されるまで、それまでやってきたのと同じ方法で仕事に精を出しつづけた。しか

し、アイ・ビー・エムのコンピュータでさえも書記の営みを終わらせることはできなかった。今日でもなお多くの芸術家が、ペンを用いる能力によって身を立てることができている。1920年代になると、ボドリー図書館に新しく入るスタッフは標準的・規範的書き方を学ばなければならず、その結果、図書カードの均一性が保たれたと聞いている。ここに中世の書の達人の最後の手本を見ることが出来る。

写字生に起こったことに関しては、数年前まで活版印刷が急速に彼らを仕事から追い出してしまったと一般的に考えられていた。職業人としての誇りはしばしば希望的観測の母であるとはいえ、これは当時の印刷家たちもまた心に抱いていた信念であった。初期のリヨンの印刷家、ヨハン・トレッセルは、木版印刷は写字生にほとんど影響を及ぼさなかったが、活字を用いた印刷の導入は写字生の生業に終止符を打ち、彼らが物乞いになりたくないのであれば製本のやり方を学ばざるを得なくなったと主張した。1916年にジョージ・バルウィックは1470年の時点でフランスだけで6千人もの「写本の書写のみに従事していた書き手」がいたこと、またその10年後にはこの数はほんの一握りの数に減少した、という見方を示している。1952年になってもこの見方はなお支持されていた。

しかしながら私にはこのような意見が完全に正しいとは思えない。膨大な中世の写本のコレクションについてよく知っている人、またコレクションの印刷された目録を読んだことのある人は誰も、15世紀前半のものと判断されている写本とほぼ同じ数の15世紀後半の写本がわれわれに伝わっていることを事実として知っている。さらに書かれたものと残っているものとの割合は、15世紀後半で実質的にはおそらく違っていないであろう。私は、「書写の職業人生にとって印刷技術の発明の衝撃はそれほど直接的ではなく、一般的に思われてきたほど致命的ではなかった」という見解に心から同意する。2人のイタリア人の学者（マリアーノ・ファーヴァとジョヴァンニ・ブレシアーノ）が同様に、「写字生たちは印刷の導入後も利益を伴った職業に従事し続けている」と述べている。少なくともイタリアでは、力を持った裕福な人々だけではなく、「身分が低く勤勉な」人々のニーズにも応えていた。写本と初期刊本は、ある種平和的に共存すること⁽¹³⁾、つまり政治の世界において後の時代に期待された理想を手に入れることに成功したように見える。前者は個別的、個人的なものを供給し、後者は正確で学者が必要とした有益な書物を、ドイツの聖職者でさえ買うことのできる値段で供給していた。

それでは本を書き写した人はどうなったのか。活版印刷が確立される1450年以前に従事していた、さまざまな種類の文学作品の書き手には何が起こったの

か。以前から大きな書写室に雇われていた専門家たちは、ただ肩書きを変えただけで、その結果彼らは能書家になった。とにかく彼らは、何世紀もの間自分たちの仕事であったことをそのまま続けていたのである。能書家が、それだけではないにせよ、主として「豪華な個人注文」の顧客に応じることを余儀なくされていたことを覚えておくべきである。その一方で15世紀後期になって初めて、またおそらく16世紀には完全に、能書は応用芸術、あるいは最悪の場合、単なる趣味へと変化していた。書写室そのものはその後生まれ出た印刷所や出版社と競争することはできなかつたようである。ただし書写室によっては書籍販売業者になって何とか生き延びたところもあった。しかしながら書写室で雇われていた人たちは、裕福なパトロンに帰属したり、注文による取引を行ったり⁽¹⁴⁾、数年間ヨーロッパ中を放浪し、イタリアで働くことさえあった遍歴の写字生(大部分はドイツか低地地方の出身) になったりすることができたという点で、さまざまな身の処し方を享受していた。中には競争相手と協力しみずから印刷家になる写字生もいた⁽¹⁵⁾。ただしそのうち幸運の女神が微笑まなかつた者の中には、印刷業をやめて以前の職業に戻る者もいた。このことは、15世紀が終わろうとする数年間、写字生がなおペンで生計を立てることができたという考えにとって強い証拠となる。ときとして写字生自身が出版を始めることもあったようである。このことだけで、パルマ出身の写字生ジョヴァンニ・マルコ・チニーコ（自分のことを「速筆家」と呼ぶのが気に入っていた）が書いたとして知られている、ディオゲネス・キュニクスの5つの写本（少なくともこれだけの数の写本が残っている）を説明することになるだろう。またこの頃、書籍販売業者も（リール出身のヴァトス師の名を挙げることができる）、難なく個人に売ることができるといふ確実な見込みのもとに、写字生に在庫用として写本を書くことを依頼していたようだ。

修道院の書写室は、ドイツでは確かなことだが、印刷術との競争に他国の同業者が享受した以上の大きな成功を収めたようだ。テーゲルンゼーの修道院長コンラート5世は、1461年から1492年の時期に写本の生産を積極的に奨励した。一方でクレムスマンスタール書写室は、1454年から1484年の間にウルリク・ショッペンツァウンのもとで隆盛を極めた。ベネディクトビューレンにある修道院は1495年から1510年の間に大量の羊皮紙と紙を購入した。これは明らかに本の生産のためのものであった。ザルツブルクでは多くの祈祷書が1470年に続く20年の間に清書されていた。その一方アウグスブルクでは1595年になってもまだ修道士ドレアーが「聖歌集」を書いていた。15世紀の写本市場にとってもっとも重要な発展は、「兄弟団」の設立であった。最近、E. Ph. ゴールドシュミットは、15世紀に生産された全ての本のうち4分の1がおそらく何らかの形でこ

の動きと結びついている可能性がある」と予測した。「兄弟団」は、本が単に「小さな集団の限られた人の許に」留まるのではなく、大衆に広がることを望んでいた。そしてこの目的を考慮に入れて、彼らはペンだけではなく印刷をも利用した。修道院の書写室は健全に存在しつづけた。しかし書写をすることで生計を立てなければならなかった人々とは反対に、修道院は利益を拒否していたわけではないにせよ、利益第一に活動していたのではなかったことを覚えておかなければならない。

15世紀の後半にお金に余裕のある人は写字生を雇い賃金台帳に記載し、印刷が発明される以前の数十年間、仲間としてさえ扱っていた。写字生の仕事に対する需要が供給より上回っていたことは、1465年9月のニコロ・ミケロツィのナルデイスのナルドに対する、写字生不足に関する不満によって示されている。それでもなおイーリーの司教、ウィリアム・グレイは、彼のために忙しく書写をする写字生セオデリック・ヴェルケンを抱えていただけではなく、別のドイツ人写字生某レインボールドをも雇っていた。さらにグレイは彼の秘書リチャード・ボールを写字生として使っており（ベイリオル写本(Ms.78a)参照）、またイタリア人ニコロ・ペロツィによって彼のために書かれた写本(MS. Urb. lat. 1180)を少なくとも1つは持っていた。ジョン・ファストルフ卿は、彼の秘書ウィリアム・ウスターに、このけちで年老いた騎士が求めた途方もなく雑多な仕事のほかに、写字生として働くことを要求していたようだ。ファストルフはまた、ウスターがまだフランス語の教育を受けていた時期に(1485年)、自分のためにフランス語で書かせた写本を持っていたことから、この翌年に亡くなることになるファストルフはウスター以外にも他の写字生を雇っていたに違いないと判断しなければならない。ドイツでは、ツィンベルンの男爵であるヨハン・ヴェルンヘルが、印刷本の質が非常に悪かったことから、彼の図書館のための写本を書かせるべく写字生ガブリエル・リンデンナストを雇っていた。ボローニャのヴェンティブオーリオとナポリのアラゴン家の宮廷はともに、1450年以降も写字生を雇い続け、ヴァチカンの写字生は16世紀後半においてもなお本を生産していた。フェルディナンド・ルアーノは、1551年から1553年の間に少なくとも5つの写本をローマ教皇の図書館のために作った。一方で1556年から1558年の間には、ジャンフランチェスコ・クレッシイがローマ教皇庁のために羊皮紙と紙による聖書を作っている。ウルビノの公爵で1482年9月10日に亡くなったモンテフェルトロのフェデリーゴ3世は、ピステッチの書籍販売業者ヴェスパジアーノから卸しで大量に買っただけでなく、彼の司書であるヴェテラーノに自分のために本の書写をさせていた。1560年代に、ハインリッヒ・ルーディングーは彼の主人でとても誉められない外見

のパラティン伯オットハインリッヒのために文書を書いていた。このパラティン伯が自分のことを「人ではなく怪物のような人」と評したことを読者は思い出すかもしれない。

熟練した写字生は印刷技術の発明後もヴェスパジアーノの伝統にのっとり、注文の仕事が続けていた。イングランドの王族と貴族は、「豪華な」書物のためにブルージュやその他の大陸の町へと向かった。かくしてエドワード4世は、フランダースでボッカチオの『貴人の没落』や『トロイの歴史集成』のフランス語写本を購入した。ただし、ブルージュでコラード・マンションとウィリアム・キャクストンによって生産されていたこれらの印刷本は、すでにその頃市場に出ていたようである⁽¹⁶⁾。ヘンリー8世とアランデルの伯爵ヘンリ・フィッツァランは、イングランドに居住する大陸の写字生に豪華な書物を自分たちのために作るように依頼した。オーモンドの7代目伯爵であるトマス・バトラーのために書かれた興味深い時祷書(MS. Royal 2 B XV)が証拠となるように、有能なイングランドの写字生もまた貴族の中に顧客を見つけていた。1487年にカラブリアの公爵（イタリアの1例のみを引用する）が、写字生ジョヴァン・ライナルドに羊皮紙の『ナポリ年代記』を注文している。

レオンハルト・ヴァーグナー（1454年アウグスブルク生まれ）は、彼自身の目録によると49冊ほどの写本を書いている。彼は主として彼自身の修道院のために書いているが、ときにはマクシミリアン皇帝を含む他の人のために書くこともあった。ヴァーグナーのもっとも有名な作品は『100の筆跡事例集』で、100種類の異なる書法を含んだ手引書である。現在2つの写本で残っている。この事例集の中で提示されているおよそ半分の書法の形式は過去のものであり、15世紀や16世紀にはアウグスブルクでもそれ以外の場所でも用いられていなかった。彼が「新しい」書法で書いたかどうかはさておき、彼の写本の内容は中世風の特徴を持っていた。つまり私たちはレオンハルト・ヴァーグナーの中に、写字生から能書家への移行を見ることができるのである。

15世紀の間、要求があればどんな場合にも、人の手によって書かれなければならない本が2種類あった。まず第1に1490年以前にはギリシア語による印刷がまだ十分に発達しておらず、アルドゥス・マヌティウスとヨハン・フローベンが以後数十年かけてこの種の出版に投資をすることになった。確かにいくらかのギリシア語の印刷物は存在した。しかしそれは量的に限られており、ほんのわずかな例外を除いて外見や本文は粗悪であった。ギリシア語を書くことに熟達していたギリシアの写字生とイタリアの写字生は、15世紀を通して彼らの商品を求めるほぼ限りない市場を見いだすことができた。また彼らは、イタリアの顧客のためだけではなく、フランス（スパルタのジョージ・ハーモニウス

など) やイングランド (ジョン・サーボポロス、コンスタンティノーブルのエマニュエルなど) においても働いていた。文明世界のまさに周縁の地においてすら、当時の解説によればギリシア語の写本に対する需要があった。15世紀の第3四半世紀に、ハンガリーのペーチ (ドイツ語ではフュンフキルヒェン) の司教ヤヌス・パノニウス3世は、彼がまだ持っていなかったギリシア語文献の筆写のためにイタリアにお金を残していた。写字生は、他人のために仕事をするだけでなく、彼ら自身のためにも書いた。これに関連して、コルフ、クレタ、ローマにおいて、1462年から81年の間に少なくとも7つの写本を書いたデメトリウス・トリヴォリスは注目すべきである。このうちの5つには、それらが「彼の作品であり彼の所有物」であるというメモがついている。ギリシア語の写本は古典文学の最も名高く、博学な人々によって全て筆写され、今日まで残っている。エラスムス、イル・コドロ、フィチーノ、フィレルフォ、ビュデ、エティエンヌをここで選び出すことができる。ブレスニア近くのカストレッツァートのバルトロメオ・ツァネッティは、16世紀前半にフィレンツェ、ローマ、ヴェネチアでギリシア語のテキストを印刷した。しかしながら彼はまた、バルトロマイオス・ブリクシアスという名前で、ギリシア語の写本を作成する際に写字生としても働いた。

ギリシア語の文献に加えて、まだ刊本の形で現れていないラテン語の文献があった。それは主題が出版には不向きで不相当であったから、あるいはこれらの作品の潜在的な売り上げがあまりにも限られていて、わざわざ活字を組みあげ出版する保証がとれなかったから、という理由によるものであった。まだ印刷されていない文献が必要なときには、当然人の手によって複製されなければならなかった。遊歴書生の写本や、年金の終生受給権を攻撃した風刺詩の写本、15世紀のタプススの司教ヴィギリウスによるものや、サイモン・イズリップによる『帝王学』(エドワード3世のために書かれた) などの珍しい宗教的、説教的なパンフレット、マームズベリーのウィリアムやハンティントンのヘンリーらによる地方の年代記、辺境の司教区のための祈祷書など、これらのテキストはまだ活版印刷の名譽に浴していなかったため、さらに手本が必要なときには新たに筆写されなければならなかった。たとえば1488年にはナポリのアラゴン家の宮廷は、アルバートゥス・マグヌスの『神の不思議な知恵について』(『神学大全』として有名) の羊皮紙コピーを用意するために、フランデーノのジョバンニという写字生に12ダカットを払っている。この作品が印行されなかったことは、権威ある『初期刊本目録』からも伺い知ることができる。

一方なぜ学者は自分自身のために写本を書いてもらう必要を感じたのか、ときとして疑問に思わずにはいられない。たとえばミランドーラのピコは1481年

8月17日と書かれたプリニウスの『博物学』のコピーを作らせた。そのとき8つもの版がすでに印刷されていたのである。これらの版がすでに全て「絶版」になっていたということがあるだろうか。先ほど触れた写字生のフランデーノのジョバンニは、3年前に『大全』の完全版がパヴィアで印刷されたという事実があるにもかかわらず、1492年にナポリの「非嫡子王」フェルディナンドのためにヘイルズのアレクザンダーの『作品』を1つ筆写している。大変長大な作品である聖トマス・アクイナスの『パウロ書簡覚え書き』は1482年にはすでにボローニャで印刷されていたが、おそらく1491年から93年の頃にフランデースで完全に書き写され、それが3巻の大型羊皮紙本となっている。15世紀も終わりに向かう頃、質の劣る相当数の手書き時祷書が生産され、パリの印刷業者の専門である祈禱書の大変すばらしい印刷版と直接争うことになったという事実もある。

またこの頃、彼ら自身の使用や娯楽のために本を書く学者たちを見ても、彼らの活動が明らかに鈍る兆しはなかった。ニュルンベルクの2人の人文主義者、ハートマン・シェデルと彼のずっと年上の従兄弟であるハーマンの活動がこのことを示している。2人はイタリア訪問にさいして、彼らが必要とした、または欲しかったテキストの膨大なコピーを作った。それらの写本のほとんどは現在バイエルン州立図書館に残っている。もちろん当時の読者は写本や初期刊本を区別なく使い続けた。現在われわれが知る限り、まだ出版されていない書物からの引用や参照は、15世紀後期になっても手書きの本が続けて使われていたことを示している。立派な国立図書館の棚に眠っている数えきれないほどの当時の写本、あるいは展示室のディスプレイに決して展示されることのないそれらの写本の大半は自分たちの研究との関連で無名の学者によって書かれたものである。しかしそれらの写本は書かれただけではない。買い取られたり、売られたり、あるいは交換されたりもした。「筆写された作品」はチャーサーのオックスフォードの学僧ニコラスのように、まだ「彼のベッドの頭のほうにある本棚」の名誉ある位置を占め続けていたからである。あらためて強調する必要もないことではあるが、本の取引は15世紀を通して、多くは中古品のビジネスであった。印刷術の発明をもって、新品の本の市場が一般的なものになったのである。

安価なものでも装丁の高価なものでも無数の版のなかにあって、世紀の変わり目に（そして16世紀に入って後も）筆写されたアリストテレスや、カトゥルス、キケロ、ホラティウス、ユウェナリス、マルティアリス、ペルシウス、セネカ、ウェルギリウスのようなギリシャ・ローマ時代の著者の書き物を目にするとき、まさにそれらの存在そのものに当惑せずにはいられない。もちろん装

飾を凝らした書き物は裕福な層の特権であった。しかし古典を飾ることなく実用目的で筆写するこのような行為は、次のように考えて初めて説明がつく。15世紀末には、自分用の写本を書く方が、たとえ中古品でも印刷版を買うよりも依然として経済的であったということである。ロインのヴォルフガング修道院長(1481-1515)は多くの本を書き、見栄を張って、それも修道士らしからぬ豪華さで自分自身の書き物の豪華版を作ったことが記録されている。ときにはまた、このような立派な本を書くことは神を愛する行為となった。したがってフォラウ修道院の図書館員ヨハン・アントニウス・ツングは、老年になって彼の修道院で使用するために聖歌集を書いた。それらは大きな本で立派に書かれ、見事に装飾されていたと言われている。ツングは85歳で没した。1775年のことである。

ここまで述べてきた状況は、この講義の最初に言及したように、印刷本に手書きの写しが存在することに対する説明となっているように思われる。数年前、私はキャクストンの印刷物から直接に由来する20の写本のリストを出版した⁽¹⁷⁾。このリストに私は今なら1482年の『イングランド年代記』のコピーである、ケンブリッジ、ピーターハウスの写本(MS. 190)を加えることができる。ウィンキン・ド・ウォードによる印刷物と、『聖オルバンズの手紙』の刊本も同じように書き写されている⁽¹⁸⁾。1499年6月22日にルーアンでマルタン・モリンによって印刷された刊本どおりに作成された、ジョン・マークの『祝日説教集』の写しがある。奥書に見られる筆写の誤り(“Finitum”に対して“Tinctum”、“Iunii”に対して“primi”)は、写字生の知識や教養、注意力のなさ、あるいはむしろその3つ全部の不足を示す強力な証拠となっている。筆写は、ときにはたとえばケンブリッジ、セント・ジョーンズの写本(MS. 178)におけるように、そっくりそのままに書き写すこともあった。記述目録はこの点を指摘してはいないが、ヨハン・ナイダーによる『敬虔な良心の慰め』を扱うこの羊皮紙写本は、1494年1月31日にあの若くて無法者のピエール・ル・ドリユによってパリで印行された版からの写しである。その写本と活字本はページあたりの行数、版型や折丁も同じであり、同一の奥書をも持つ。それゆえに、非常に近い、あるいはまったく同一の、ページ単位の初期刊本の複製本となっている。

そのような作品はヨハン・トリットハイム修道院長による見解から説明がつくかもしれない。彼は「実際もし書き物が羊皮紙に書かれたら、千年はもつだろう。しかしながら、もし紙に印刷がなされたのならどれくらいもつであろうか。紙の本の印刷が200年も保てばよいほうではないだろうか」と述べている。今なら分かることではあるが、修道院長の判断は誤っていた。なぜなら500年前の紙は現在でも当時のまま丈夫で、しかも張りがあるように見えるからである。

しかしながら自分の写字生たちに印刷された本文を羊皮紙に書写すること（「印刷本を永遠に残すために書き写す」）を勧めたトリットハイムの熱意は賞賛に値する。

周知のことではあるが、ハートマン・シェデルは彼の蔵書用に多くの印刷本（そのほとんどはイタリアのもの）を筆写した。しかしなぜ彼がそうしたのかは、それほど明らかではない。というのも彼は非常に裕福な家庭の出身であったからである。彼はこれらの刊本そのものをイタリアから入手することができなかったために筆写させた、という説明がなされてきた。そうだとすれば、彼が作った写本の原典はどこで手に入れたのであろうか。説明が難しいのは、エルモラオ・バルバーロが書いた『神聖ローマ帝国皇帝フレデリック3世とマクシミリアン1世の演説』の現存する5つの写本の状況である。ゲント、ブレシア、フィレンツェ、ナポリ、ヴァチカンのそれぞれが、このテキストの写本を1つずつ所蔵している。しかしこれら5つのうち、1つとして写本に基づいたものはない。ゲントにある羊皮紙写本は、演説が行われた直後（1486年8月13日）にティエリー・マルテンスによりアールストで印刷された版に基づいている。他の4つも全て同年8月の終わりにストラータのアントニウスによって作られたヴェネチア版に由来する。シュテファン・プランクによって出版されたローマ版とペーター・ヴァーグナーのニュルンベルク版とともに、上記2つの版は市場の需要を満たし、皇帝による演説が行われ、それが済んでしまったときに、こうした短命な演説の草稿をわざわざ元の原稿から清書することを不要にした、と説明できるのかもしれない。

15世紀が終わっても、このように初期刊本を書写する習慣は決してなくならなかった。たとえば私はヴィエンヌの司教アルキムス・アヴィトス（6世紀初めに死亡）による『この世のはじまり』の写本を所有しているが、奥書にはこの書物が1522年11月29日の日曜日に修道士ヴァルテル・ヨハンニスによって印刷本の初版（1507年8月29日）から書写されたことが述べられている。より野心的な企ては、クリストファー・プランタンによって1571年にアントワープで印行された『祈祷書』からの書写（1582-1590）で、これには500枚ほどの挿絵が加えられている。17世紀以降もこのような書写の例が挙げられる。たとえば私は『哲人の箴言と金言集』という写本を所有しているが、この写本には「1621年5月に使用人ジョン・メイによって私のために書かれた」という跋文がついており、明らかにピーター・マンウッド卿の依頼によるものであることがわかる。このような写本の製作は、おそらく好古趣味によって説明されるであろう。18世紀までに、能書家もまた初期刊本を自分たちが使うのにふさわしい手本としてとらえていた。フィリップ・ホーファー氏は現在、ピエトロ・アレティー

ノ作で、1762年にイタリア北部でフリウリの能書家アマデオ・マッツォーリによって書かれた見事な写本『哲学者』を所有している。これは1546年ヴェネチア版のほぼ完璧な複製である。すぐれた書法技術の例としてのこの写本の価値を下げることはないが、もし芸術家が自分の目的のために本物のジオリート版ではなく、1730年にベルシアでファウステイーノ・アヴォガドロによって作られた贋作の写しを選んでいたら、奇妙な運命のねじれを起していたであろう。

一見するとこのような印刷本の写本はひどく無価値であるように思えるが、幸いそうではない。奇妙なことにこういった写本の多くは書記上の習慣やならわしの研究にとっては非常に価値がある。直接の手本が印刷されたものである場合、それは写字生の仕事ぶりを評価する絶対的な基準になる。手稿本から製作される写本の場合には、写しの正確な「手本」が疑いなく特定されることはまれにしか起こらない。その結果、写字生が原典に対してどれほど正確に、あるいは不正確に書写しているのか、または写字生の意図的試みと考える場合、どれほど本文に忠実にあるいは手本から逸脱しているか、その可能性を判断することは不可能である。しかし初期刊本とその写しを並べて比較することができる場合には、写字生の能力の有無、彼の癖や個性がすぐさま明らかになる。たとえばエラスムス・ストラッターは、印刷家メンテリンのドイツ語聖書を1466年頃に書写し、それは現在グラーツ大学の図書館にある。しかし彼はそのさい原典の方言をみずからの南部バイエルン方言に置きかえている。ストラッターの編集ぶりは、ディーボルド・ラウバーが顧客に「宮廷叙事詩」の写本を提供するさい、本文に施した現代化ほどには自由気ままなものではなかった。ハーレー写本(MS. 6149)は、キャクストンの『騎士道の書』の写しであるが、この写本の方言はロンドン方言ではなく、全体を通してスコットランド方言で筆写されている。このような書きかえの例はほかにもある。ニューベリー図書館には『哲人の箴言と金言』のテキストがある。この写本は明らかにキャクストンの初版からの写しではあるが、いくぶん短縮されており、用いられている方言は著者(リヴァーズ伯)のものでも印刷家のものでもない。この場合写字生が原典の文体に改良を加えたようで、文章がより良くしかも簡潔になっているように思われる。つまり彼は原典に忠実な写字生ではなかったのだ。モーガン写本(MS. 801)には、ヴェルナー・ローレウヰンク著の『歴史小史』のラドルト版(ヴェネチア、1481)の写しがある。いくつかの箇所では写字生は明らかに本文の意味や構成の順序を理解していないので、この写しは読者に全く不可解な混乱を提示してしまっている。

これらの写本が当時の書記上の習慣や伝統に関してして示す証拠よりもさら

に重要なことは、写本がそのような刊本がかつて存在したことを示す唯一の証拠になるということだ。イエール大学図書館の「混成冊子」には、教皇ピウス2世の『サッフォーの詩』の写しが次のような奥書とともに載っている。「ロイトリンゲンのギンテルム・ツァイナーによってアウグスタにて印刷される。」しかしこのテキストのツァイナー版はいまだ発見されていない。ウィーンに所蔵されているある写本は1510年にストラスブルクでマルティン・フラーハによって印刷された『魂の園』の写しだが、やはり刊本そのものは1部も現存していないようである。私自身の蔵書には、16世紀後期の『聖ウィニフリッドの生涯』という写本があり、これには「古い印刷本から一語一語作成した」という注がついている。ここでの「印刷」('printing')という語がどのような意味であるのか、つまり原典が活字を使った印刷によるのか、手書きの結果であるのか、ということはいまだはっきりしていない。この本文はキャクストン版『黄金伝説』における記述に基づいているが、これとは著しく異なっている。私はまだこの写本の印刷版を発見することには成功していないが、あるとすればそこからこの写本が書写されたことになる。ボドリー図書館の写本(MS. Douce 261)は『ガウェイン卿の冒険譚』の初期印刷本を1564年に写したものであるが、またしても私はこの出典をつきとめることができていない。印刷本の原典が完全に紛失しているこれらの写本の存在価値は自明のことである。

写字生がいかにさまざまな方法で印刷術との競合に対処していたのかということを見てきた。コンラッド・スウェイヘイムとアルノルドゥス・パンナナルツが1468年にローマで印刷した聖ジェロームの『書簡』の前書きで、アレリアの司教ヨハンネス・アンドレアエは、以前手に入れていた白紙の紙や羊皮紙に代わって今後はもっとも好ましい本が購入されるだろうと述べ、現在ではかつて製本に支払われていたような値が本の価格につけられていると断言している。さらにこれらの書物は正確に「書かれ」、写字生の仕事に想起される書き誤りをともなって制作されることはほとんどなかった。アッペンブレックの写字生セオデリクス・ニコラウス・ウェルケンは1477年に上述の刊本『書簡』を筆写し、それがケンブリッジ、トリニティ・カレッジの図書館にある写本(MS. R. 17.4)として現存しているが、この中に先の「正確」をめぐる文言を大まじめに書き写していることを考えると何とも皮肉なことである。

[書物略解]

本稿は Curt F. Bühler (著) *The Fifteenth Century Book: the Scribes, the Printers, the Decorators* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1960) 訳出の一環として、第1章「写字生」(pp. 15-39)の翻訳を試みるものである。

本書は、A. S. W. ローゼンバッハ特別研究員(書誌学)としてペンシルヴァニア大学に招かれたC. ビューラーが3回(1959年9日、16日、23日)にわたり行った記念講演をもとに出版されたものである。グーテンベルクが印刷技術を発明したことにより、出版のメディアが写本から印刷へと移行した。この歴史的出来事が生じた、15世紀後半の変革過程に分け入り、写本文化から印刷文化への移行が実際どのように展開されたのかを明らかにするのが、記念講演のテーマである。写本制作の担い手や写本の受容者は、急激にあるいは一挙に、新しい出版メディアの世界に取りこまれていった、というのが従来の解釈であった。こうした文化の断絶に対して、ビューラーは、刊本揺籃期を文化の連続体として捉え、新旧のメディアが相互依存する状況を本書において初めて示した。両文化の接点における連続性を明らかにするために、著者は、書物生産の担い手である「写字生」、「印刷家」、「装飾家」の3つの観点から、変革期における彼らの活動をヨーロッパ全体の書物をとおして記述している。

15世紀の書物を眺めるビューラーの新しい見方は、たとえば、Rudolph Hirsch (著) *Printing, Selling and Reading* (Wiesbaden, 1967)、Jeremy Griffiths and Derek Pearsall (編) *Book Production and Publishing in Britain 1375-1475* (Cambridge, 1989)、Sandra Hindman (編) *Printing the Written Word: the Social History of Books, circa 1450-1520* (Ithaca, 1991) などに発展的に継承され、英国の書物史を通覧するシリーズ第3巻 *The Book in Britain: 1400-1557* (Cambridge, 1999) においてもビューラーの地平のもと、「技術と取引」、「コレクションと所有者」、「読書と書物の利用」、「一般読者」の領域における文化の連続性が論じられている。

このような包括書に加え、幾多の個別論文を導いたビューラーの講演録は、実に独創に富み、書物文化史を志す者には避けて通れない書であり、幾多の研究の種を胚胎している。訳出にあたって、思想の総体とそれを裏打ちする証拠を得ることを主眼として、講演論文本体の訳出を中心に据えた。論文に付された詳細な注釈(25ページの本論に対し197の巻末注)は、訳者の判断により必要最小限に留め、必要に応じて訳者自身による注釈を加えた。

[注釈]

- (1) [原注1] Wlater A. Copinger, *Supplement to Hain's Repertorium bibliographicum* (London, 1895-1902), Marinus Cambell, *Annales de la typographie néerlandaise au XV^e siècle* (The Hague, 1874-90), M. Louis Polain, *Catalogue des livres imprimés au quinzième siècle des bibliothèques de Belgique* (Bruxelles, 1932)の書誌目録をそれぞれ参照。
- (2) [原注9] この表現については Fritz Milkau, *Handbuch der Bibliothekswissenschaft*

(Wiesbaden, 1952-59), vol. I. p. 422 を参照。同様に、E. Gordon Duff (*William Caxton* [Chicago, 1905], p. 25) は、初期の印刷家がそう呼ぶように、印刷のことを「機械的な手段を用いて書く技術」と述べている。

- (3) [訳者注] たとえばチャーサーは、短詩「書記アダムへのチャーサー自身の言葉」の中で、お抱え写字生アダムに対して次のように不満を述べている。

私の書記、アダムよ、もしもボエースやトロイラスを／ 新たに書くようなことが君に起きて、／ 私の詩句のとおり正しく筆写しないなら、君は／ 頭髪の下を疥癬病で冒されるかもしれないよ。／ 1日に何度も私は君の仕事を書き換え、また／ 修正したり、削り落としたりしなければならないことか。／ これはすべて君の怠慢と軽率さのためなのだよ。

(訳は佐藤勉訳著『チャーサー小詩の世界』（高文堂出版社、1985）による。)

チャーサーは、『トロイラスとクリセイダ』の中でも本文の誤転写に触れている。しかも英語およびわがラテン語の表現にはいちじるしい多様性があるゆえに、神よねがわくは、人が書き写しあやまったり、ラテン語の力不足のためにその韻律をあやまたざらんことを。

(第5巻、1793-95行) (訳は刈田元司訳『恋のとりこ』（伸光社、1983）による。)

- (4) [原注25] キャクストンがキケロの『老いについて』の英語版を印刷しようとしたとき、この書物の写本を入手するのに「たいそうな苦勞」をしたようである。結局、彼が言うには、写本を1つ「いろいろ頼み込んだあげく、途方もない労力とお金を出して手に入れた」そうである。(ピアポイント・モーガン図書館蔵キャクストン版 CL 1772, sig. I 2^v-I 3^rを参照。) Wilhelm Wattenbach (*Das Schriftwesen im Mittelalter* [Graz, 1958], p. 547) は写本の価格について、1074年では時禱書の作成は葡萄酒に相当する、と述べている。写字生はワインがお好きであったことは、Wattenbach が506と516ページに転載している奥付からもうなずける。
- (5) [原注33] ペトラルカは1362年までには300冊あるいはそれ以上の書物を所有していた。(E.H. Wilkins, 'Petrarch's Proposal for a Public Library,' *The Boston Public Library Quarterly*, X [1958], 196-202 を参照。)
- (6) [原注44] もちろん刊本も同じ運命を辿ることとなった。ボドリー図書館は、シェイクスピアの第3フォリオ版(1664年)を受け入れたとき、フォリオ初版を不要なものと考え、他の書物といっしょにオクスフォードの書物商リチャード・デイヴィスに24ポンドで売却している。Robert M. Smith, 'Why a First Folio Shakespeare remained in England,' *Review of English Studies*, XV (1939), 257-264 を参照。
- (7) [原注50] この立場をとるのは Hans Wegener ('Die deutschen Volkshandschriften des späten Mittelalters,' *Mittelalterliche Handschriften* [Leipzig, 1926], pp. 317-18) である。どこにも所属することなく片手間に仕事をする写字生は写本の商いになら実質的な貢献はしなかった、という異なる見解を表明したのは John H. Harrington (*The Production and Distribution of Books in Western Europe to the Year 1500* (New York, 1956), p. 82) である。書かれた多くの写本のうち、

そのいくばくかは中古市場に出回ったかもしれないが、おそらく彼らが制作した写本のほとんどは取引の対象にはならなかったのであろう。

- (8) [原注65] Laura Loomis, 'The Auchinleck Manuscript and a Possible London Bookshop of 1330-1340,' *Publications of the Modern Language Association of America*, LVII (1942), 595-627. H.S. Bennett ('The Production and Dissemination of Vernacular Manuscripts in the Fifteenth Century,' *The Library*, 5th ser., I [1947], 174)によれば、職業的な写字生の組織と彼らの日常的な活動についてはいまだ十分な情報が不足している。
- (9) [原注66] E.P. Goldschmidt ('Preserved for Posterity, Some Remarks on Medieval Manuscripts,' *The New Colophon*, II (1950), 330-32, esp. p. 331)は次のように述べている。「ヴェスパジアーノの筆による見事な作品も、本文の観点から言えば、きわめてぞんざいな仕事である。行がまるまる抜け落ちていたり、誤りが多く、くり返しは訂正されないままである。美しいページを損なうどころではない。ヴェスパジアーノの写本は、読みたい人のためではなく、所有しておきたい人のために書かれたものといえる。写字生たちはこのあたりの事情をよく心得て、意味よりも文字が揃っていることにより注意を払った。」Strabo (Loeb Library, VI, 112-13)は「劣悪な手本を用いて、しかも本文の校合を行おうともしない書籍販売業者」について不満を述べている。「豪華写本」ほど痛みが少ないことをなにも不思議がる必要はないのである。
- (10) [原注79]ペトラルカの写本入手には、「買い取り、寄贈、みずから制作、あるいは人に作成させる」の4通りがあった(Wilkinsの上掲論文 'Petrarch's Proposal for a Public Library,' p. 196)。ペトラルカのお抱え写字生については、Milkauの上掲書 *Handbuch der Bibliothekswissenschaft*, vol. I. p. 871 と Hans Widman, *Geschichte des Buchhandels vom Altertum bis zur Gegenwart* (Wiesbaden, 1952), p. 21 を参照のこと。
- (11) [原注83] チョーサー自身の写字生については、彼の詩 "Unto Adam, his owne Scribeyn" を参照。(注3 [訳者注] 内の訳文参照。)
- (12) [訳者注] たとえばキャクストンの印刷物をめぐる「混成冊子('Sammelbände')」については、Paul Needhamによる詳細な研究リストがある。*The Printer and the Pardoner* (Washington: Library of Congress, 1986), esp. pp. 65-80.
- (13) [原注103] 一方にないものを時として他方が補うという関係があった。たとえば、16世紀まで印刷家が扱わなかった小型の聖書を、13世紀以来、写本の業界が供給してきた。L. Fevré and H. Martin, *L'apparition du livre* (Paris, 1958) (関根素子他訳『書物の出現』(筑摩書房1998)、pp. 3-4を参照。
- (14) [原注109] 「中世写本の市場は一般的に注文制であり、英国において個人の顧客用に制作された最初の書物は、おそらく英国の市場に向けてフランダース地方で書かれた聖務日課書や時禱書であった」と、かつて私(講演者)は述べた('Report on Mr. Graham Pollard's Sandars lectures,' *Times Literary Supplement*, 20 February

1959, p. 104)。

- (15) [原注111, 112] William Ebesham は印刷技術が英国に導入される前もその後にも写字生として活躍し、たとえば1485年の少し前にはウェストミンスター・アベイの公式記録（その1）とその写しとを作成した（英国紋章院の写本(Young MS. 72)を参照）。エベシャムはキャクストンが印刷業を営んでいるときに同じウェストミンスター・アベイの一角を借りていた。A.I. Doyle ('The Work of a late Fifteenth-Century English Scribe, William Ebesham,' *Bulletin of the John Rylands Library*, XXXIX [1957], 298-325)は、「仲間の店子であるキャクストンとの関係は、職業的書記と印刷出版との競争的關係よりもむしろ両者の初期の協同關係を証明している」と述べた。

[以下、訳者注] エベシャムは、パストン家(John Paston I)のためにいわゆる“Grete Boke”を書いた写字生としても知られている。詳細は、G. A. Lester, *Sir Joh Paton's 'Grete Boke': A Descriptive Catalogue, with an Introduction, of British Library MS Lansdowne 285* (Cambridge: D.S. Brewer, 1984)を参照。

- (16) [訳者注] キャクストンとコラード・マンションとの関係およびブルージュで出版された『トロイの歴史集成』については、たとえば George D. Painter, *William Caxton* (London: Chatto & Windus, 1976), Lotte Hellinga, *Caxton in Focus* (London: The British Library 1982) (高宮利行訳、『キャクストン印刷の謎』（雄松堂出版、1991) に詳しい。

- (17) [原注168] 拙論 'The *Fasciculus temporum* and Morgan Manuscript 801,' *Speculum*, XXVII (1952), 182-83, note 29 を参照。

[以下、訳者注] キャクストンの印刷物から書き写された現存写本のリストは、修正補足のうえ、Norman Blake, 'Appendix A: Caxton Prints for Which a Copy-Text Survives or Which Were Used as Copy,' to "Manuscript to Print," in *William Caxton and English Literary Culture* (London: The Humbledon Press, 1991), pp. 294-99にまとめられている。

- (18) [訳者注] ここで、ボドリー図書館写本(MS. Rawlinson poet. 143)はセント・オルバンズの印刷家が出版した『聖オルバンズの手紙』を書き写したものである、とビューラーは考えているが、この説は Rachel Hands, *English Hawking and Hunting in the Boke of St Albans* (London, 1975) により否定された。Blake の上掲書 (p. 303) を参照。